

1. はじめに

今年、任期満了に伴い、技術士会の幹事ならびに役員を退任しました。このようなタイミングで本コーナーの執筆を依頼されることは、広報委員の経験から知っておりましたが、私に依頼が来るとは感慨深いものがあります。めったにない機会ですので、僭越ではありますが 30 年余りの技術者人生を振り返ってみたいと思います。退職のたびに、断捨離をしたので手元資料に乏しく、記憶に頼った記述となりますので、「思い出補正」や正確性に欠ける表現がありますが、ご容赦いただきたく存じます。

2. 農業の技術者になるまで

出身は北海道空知管内滝川市で、高校卒業まで過ごしました。実家は父方の祖父母と同居をしており、祖父母は昭和 30 年代終わりごろまで農業を営んでいた時のことを、折にふれて話してくれました。家に農耕馬がいたこと、田植えは腰まで田んぼの冷たい水に浸かりながらの重労働だったこと、祖父母のしわがれた声と手が思い出されます。

小学 2 年生に転校した新設校では、クラスごとに学級園が割り当てられ農作業が授業の一環としてあり、通学路にはソバ畑や玉ねぎ畑が広がっていたので農業は身近な存在でした。

中学生の時分に、24 時間テレビでいわゆる発展途上国の内戦や気象災害に伴う飢餓問題を知り、人が生きていくには水と食料を確保することが大切だと知りました。それがきっかけで、発展途上国の農村開発に興味を持ち、東京農業大学農業拓殖学科(当時)を志望し、入学、卒業をしました。大学生活は、サークルとバイトに明け暮れ、大いに都会生活を満喫しました。入学当初の高い志とはうらはらに、勉強は最低限の単位を取得する程度でした。

就職は、北海道に戻り何か農業に関する仕事を、

と考えて、深川市に本社がある財団法人北海道農業近代化コンサルタント(当時)に 1993 年(平成 5 年)に入社しました。そんな程度の認識ですので、業界研究をするでもなく、建設コンサルタントが何をするのか、よくわからない状態で私の農業技術者人生が始まりました。

3. 思い出深い仕事

(1) 水稻の直播栽培検証業務

配属先では、農業農村整備事業にかかる水文調査や動植物調査を担当したほか、空知管内某市で先駆的な取り組みとして展開されていた、水稻の直播栽培(ちよくはんさいばい：田んぼに直接種もみをまくことで、育苗過程を省略して、水稻の生産コストを低減する営農技術)の検証業務を担当しました。

何を見ても初めてのことで、ついていくのがやっと・・・というのか、理数系にうとくて、ついていけないので何をしても苦勞しました。業務経験も人生経験も浅い自分がコンサルティングとは、おこがましい！この仕事に向いていない！と思いながら仕事をしていました。当時、女性技術者は本当に数少なく、私を指導した上司にとって女性を部下に持つのは初めてだったと思いますし、さぞご苦勞されたことと思います。

社会状況もめまぐるしく変化していて、農業農村整備事業の予算(当初予算)を調べたところ¹⁾、入社当時の 1993 年は 1 兆 1,543 億円、退職した 2024 年(令和 6 年)は 3,771 億円。おそらく業務量は予算規模に応じて昔は多かったのでしょう。業務量の多さに加えて、資料作成が手書きから PC へと変わり、OS も数年おきにバージョンアップして操作方法の習得に難儀したものです。

そんな中、様々な現場で、川に入り、山を歩き、田畑に入り、北海道内のさまざまな農村風景や営農

形態に触れることができました。夏でも冷涼な道北、道東の酪農地帯、どこまでも平坦な畑地が続く十勝の景色。いわゆる北海道らしさとは一線を画した叙情豊かな道南の水田地帯、そして私の原風景であるピンネシリを借景とした石狩平野に広がる空知の水田地帯。業務を通じた農家さんとの会話の中で、水田地帯の方々は、水田の水利用や防除作業など地域一体で日程調整を要することを背景として、調和を重んじる気質を感じる一方で、畑作地帯や酪農地帯では強い独立心を感じました。



写真-1 現地調査の様子

入社以来 7 年ほど、ほ場(田畑)の大区画化と水稻の直播栽培導入による水稻の生産コスト低減効果検証調査の一環として、水稻の生育状況を計測したり、パーシャルフリーウムで水田の用排水量を計測しました。加えて、農作業時間を実測しました。調査対象ほ場の近くに車を停めて、トラクターやコンバインの作業時間を、車中からストップウォッチ片手に計測しました。これらの機械作業は、機械の巡回時に走行速度が下がり作業効率の低下に直結するので、ほ場形状はできるだけ直進する時間を最大化するのが望ましいのです。もっとも苦労したのが農家さんとのやりとりで、携帯電話がない時代でしたから、自宅に電話して、奥様やお子様が電話に出ると要件を説明するのに苦労しました。検証調査の初年度 1993 年は、コメの作況指数が 74 と大不作で、「平成の米騒動」と呼ばれた年でした。その年の生育データや収量データは、異常値としてのちに棄却対象になったことは残念なことでした。

調査日程は農家さんの営農の都合に合わせるので時間も曜日も関係なく設定され大変でしたが、実際の営農作業を間近で見ることができて、作物の生育ステージや営農作業時期に関する感覚を養えたこと

は得難い経験でした。

(2) イラストのようなものを描いてみた

1999 年に株式会社ルーラルエンジニア(以下、ル社)に転籍し、国営農地再編整備事業における事業効果検証業務を主に担当し、作物の生育調査などを行い相変わらず忙しくしていました。

現地調査の業務と併行して、農業や農村のもつ多面的機能を広く一般市民に向けて説明するパンフレットや、事業説明を目的としたパネルを作成する業務も担当しました。上司や同僚の説明を理解するために書いたポンチ絵というのかイラストのようなものを書いたら、それを上司が認めてくださり業務成果に使っていただきました。

この原稿を書くにあたり、手元資料の中から 1 枚の絵を見つけました。大きさは A4 判で、何を目的に書いたのか思い出せないのですが、「畑地かんがい」、「ほ場整備」などの文字が書いてあります。

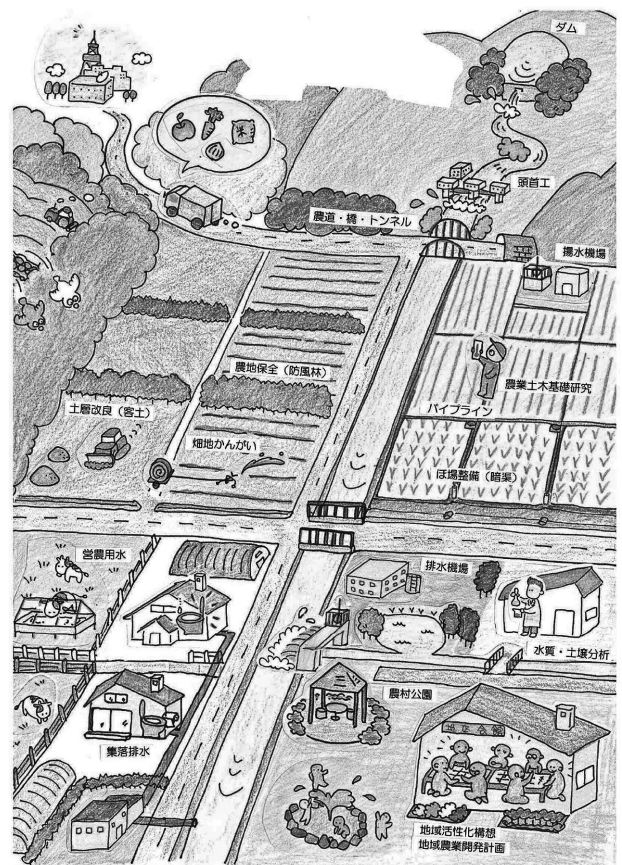


図-1 農業農村整備事業の説明図と思われる

絵の右上にダムが描かれており、ダムの水は頭首工を流下して用水路から水田へ配られる様子が表現されていました。また絵の右から左へと道路が伸びて、田畑で作られた農産物がトラックに積まれてテレビ塔のある都会へ運ばれています。

農村は農家さんの生活の場であるので、暮らしを豊かにするための地域づくりを検討している様子や農村公園も描かれています。

おそらく農業農村整備事業の説明を目的としたものでしょう。絵は水性ペンと色鉛筆で書かれており、裏面に切り貼りした箇所がいくつもあって試行錯誤の跡が伺えました。

数年後に空知管内某町において国営農地再編整備事業の完了にあたり、事業で基盤整備された水田をフィールドとした各種調査結果を1冊の冊子としてまとめる企画があがりました。

原稿執筆者は試験場、農業改良普及センター、研究所など多岐にわたり、原稿取りまとめをル社が担当しました。当時、私はル社を退職しており、上記企画のうち文書編集、イラストの作成を個人で受託して作業にあたりました。

冊子やパンフレットは、配布対象者によって表現方法を変える必要があります。上記の冊子は配布対象者が事業に参加した地元の農家さんということで、発注者様から「柔らかい表現」を要望されました。できる範囲で言葉遣いやフォントを工夫して、図や写真を多用することを心掛けました。そこで目次に1枚のイラストを添えることにしました。絵の上半分を基盤整備前のイメージ図として、狭い水田区画とそこで走行に難儀するトラクターを書き、下半分を整備後のイメージ図として、大区画化した水田区画をスムーズに走行するトラクターを書きました。さらにそこに生産コストが下がってうれしいと、笑う農家さんの笑顔を書きました²⁾。

発注者様には冊子の完成を喜んでいただき、私も今までの知識・経験の集大成のようなこの冊子の完成を達成感とともに大変うれしく思いました。

(3)もうやり残したことはない

2017年に内外エンジニアリング北海道株式会社に転職し、農業農村整備事業の事業計画や事業効果算定業務のほか、農業水利施設の機能保全計画策定業務などを担当しました。未経験の業務で、知識の習得にまた苦勞しましたが、いずれの業務においても現在から30年～40年先を見据えた計画をすることから、これらの業務を通じて、事業を俯瞰する経験になり、社会資本のあり方を考える機会になりました。親会社は本州にあり、会社行事や業務連絡などを通じて情報交換をする中で、常に府県の農業事情に触れる環境にあり、改めて北海道農業の規模や経営形態の特性を意識することになりました。

グループ会社全社が参加する技術会議において「ほ場の大区画化」をテーマとした分科会を主宰した際、「自動走行農機等に対応した農地整備に係る技術検討会」の委員である本社の方を講師にお願いしました。分科会の開催に先立ち資料収集をする中で、「自動走行農機等に対応した農地整備の手引き」³⁾に、先述した冊子の目次に使ったイラストをもとに加筆された絵が使われていました。

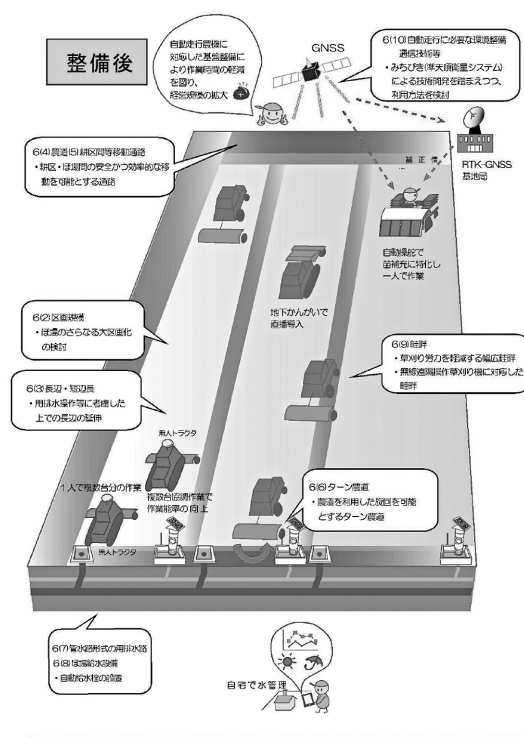


図-2 「手引き」23 ページをみて驚いた

このことは、大きな驚きとともに私の技術者人生の中でもっともうれしく、自分の絵で言いたいことが伝わるんだ、と誇りに思いました。と同時に、今まで取り組んできたことが国の手引きという形で実を結び、もうやり残したことはないと思えた出来事でした。

4. 技術士会活動

(1) 技術士会は別世界

日本技術士会には、二次試験合格・登録と同時期に入会しました。会社から入会を強く推奨され入会したものの、せっかくの日本技術士会北海道本部(以下、技術士会)や農業部会からの合格祝賀会のお誘いには乗り気になれず出席しませんでした。本誌コンサルタンツ北海道のエンジニアパークの原稿を書いたことがあります、技術士会はキラキラしたリア充の方々が集う別世界だと思っていました。仕事に疲れた当時の私に、仕事以外の場所で技術に携わるのは、とうてい理解しがたいことでした。

(2) 活動のきっかけ

技術士会での活動のきっかけは、不確かな記憶ですが、第40回技術士全国大会の分科会「技術者のワーク・ライフ・バランス」の企画・運営を有志の女性技術士が担うということで、お誘いをいただいたことでした。

私を含め数名の女性の技術士の方々が集められ、説明会と懇親会が催されました。突然にキラキラした世界に足を踏み入れることになりました。その当時ル社は退職していましたが、会社員時代の私の「ワーク・ライフ・バランス」はワークに全振り、社外の人脈は皆無、仕事が生計の主軸で、仕事をするために生きていました。きっと私以外の方々は、ワークとライフのバランスが取れていて、会社の外の世界も持っていて、知性と教養もあって充実した毎日を過ごしているんだろうな～、こんな所に私が来ていいんだろうか、と尻込みしました。懇親会の帰りに「えらいところに来ちゃったな」とパンプスを引きずって帰ったのを覚えています。

今思えば、なぜ分科会メンバーのお誘いを受けた

のか。退職をして時間に余裕ができたからなのか、それとも知らない世界への好奇心が勝ったのか。

分科会では、ワークショップ形式で参加者の意見の取りまとめをしました。業務でも経験して慣れていましたが、みなさんのレベルについていくのがやっとでした。大会交流パーティーは規模の大きさに圧倒され、全国各地から様々な部門の技術士の方々にお会いすることができ、緊張と興奮の中で初めての全国大会が終わりました。

(3) 技術士会での活動

第40回技術士全国大会への参加に前後して、広報委員会に加入させていただき、その後、事務局、総務委員会、選挙管理委員会の各委員を歴任致しました。その後幹事も務めさせていただきました。

いずれも重責でございましたが、会員ならびに役員の皆様に暖かく受け入れてくださり、それぞれの役職を全うできました。

技術士会での活動でもっとも思い出深いのは、事務局に入って年次大会や合格祝賀会で司会進行役を務めたことです。そこで話す内容や進行は、事務局の方々に入念な準備をしていただき、私は前日に原稿の読み上げ練習をして当日を迎えるだけの状態にまでしていただきました。司会進行の仕事は、技術的な素養を求められず、安心して努めることができたとは今は胸をなでおろしています。



年次大会での司会



アトラクションの司会

写真-2 技術士会での活動のヒトコマ

合格祝賀会では、毎回合格者の方々の様子を拝見するたび、技術士に合格したころの初心に帰って身が引き締まる思いで司会をしていました。

委員会活動では、会議や情報交換会を通じて、業

種・業界の異なる技術士の方々と交流する中で、たくさんの学びの機会をいただきました。競う間柄でなく、なれ合う相手でもない、心地よい緊張感の中で、自宅と職場の往復では得られない知見や人脈、自部門以外の方々に向けた説明方法、メールのやりとりを最小限にする言葉の選び方、立ち振る舞い、などなど数え上げればきりがありません。

懇親の場においても、会員の皆さまの話題の多さに舌を巻くとともに、仕事や技術のことさえも、楽しく、時には誇らしく話す姿をまぶしく、うらやましく見ていました。自分にはそこまで誇らしく話せる話題がないと思っていたからです。時折、ここに私が来ていいんだろうかと思いながら、むしろこの場にふさわしくありたいと思ったものです。ここ数年は年齢を重ねて、図々しくなったのでしょうか、最初の尻込みした気持ちは薄れて、技術士会が自分らしくいられる居場所になり、自宅、職場に続く、サードプレイスになっていきました。

昨年の退職や第50回技術士全国大会をもって、技術者として区切りをつけたいと考え、今年の任期満了をもってすべての役職を退任させていただきました。まだまだ頑張っていらっしゃる諸先輩方がいらっしゃる中で恐縮ではございますが、この度、会長表彰という栄誉に浴することができました。身に余る光栄です。



写真-3 会長表彰をいただきました

5. おわりに

本稿を通じて今までの出来事を振り返ると、何かに導かれるように、「ほ場の大区画化」、「水稻の直播栽培」による水稻の生産コスト低減効果の検証が私の主軸だったように思います。これが私のプロジェ

クトXだったのかもしれません。

もうやり残したことはないと思えるほどのテーマに携わることができて、幸せな農業技術者人生だったと思います。

奇しくも、本稿を書いているこの時期に、政府はコメ増産へと舵を切り、国の農業政策は歴史的転換を迎えましたのは因縁めいたものを感じます。

技術者としての適性や素養は十分に持ち合わせていない私でしたが、立場と役割が人を作る、と言いますとおり、技術の世界に身を置いて、現場での様々な経験や、業務や技術士会を通じて多くの方々と出会い、受け入れていただき、認めてくださったことの積み重ねが、血肉となり技術者としての私を形作ったのだと思います。

農業技術者として30年余り頑張ることができたのは、心身丈夫に生んで育ててくれた親と、私を指導してくださった諸先輩方、いつでも励ましてくれた同僚、家族のおかげです。今後は、皆さまから頂いたご厚情を恩返しするつもりで、何かの形で後進の育成に携わることができたら幸いです。

終わりにになりますが、日ごろの便利で安全安心な暮らしは、技術者の皆さまの努力、奮闘のおかげです。感謝を申し上げ筆をおきます。

参考文献

- 1) 農林水産省年報
- 2) 国営農地再編整備事業の効果一はじめよう！小さな町の大きな営農一、株式会社ルーラルエンジニア堀真史，技術協98号，一般社団法人北海道土地改良設計技術協会
- 3) 自動走行農機等に対応した農地整備の手引き，農林水産省，令和2年2月策定 令和5年3月改定

飯野良枝(いの よしえ)
技術士(農業部門)

